# ブラザーシスター

さがの准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラザーシスター

【Ｎコード】
Ｎ４９０４Ｚ

【作者名】
さがの准

【あらすじ】
半年前に起きた踏切事故。
すれ違う二人の恋人。
二人のこころが通じ合った時、真実が明かされる。

生まれ育った家が、広く感じるようになった。清々すると思っていた。なにかと口出ししてくる、うるさい相手だった。心はひどく冷え込んでいた。

半年前にあった踏切事故。心の傷は未だに癒えることなく、闇の中に沈んでいる。一つ、嘘をついた。その嘘を隠すために、もう一つ嘘をついた。そうやって重ねた嘘の重みが、徐々に増していった。いつしか、嘘という鎧が偽りの自分を作り上げていた。

今日もまた、嘘を一つ積み上げる。心の奥底からぎしぎしと軋む音が聞える。終焉の予感がした。

昼過ぎの駅前。街のざわめきに包まれ、自分一人だけとりのこされたような不安に襲われる。

待ち合わせ5分前。彼女は時間通りに来たことがない。待たされることに不満はなかった。

半年ぶりの再開になるはずだ。『おれ』に気づいてくれるだろうか？

店のショーウィンドウに写る自分を見る。見慣れない自分に嫌悪感さえ感じる。お気に入りのニット帽は、ポケットの中にしまってある。

もう一度ショーウィンドウに目を向ける。自分の情けない姿が写り、なんだか馬鹿らしくなってくる。それでも、彼女が来ないように願うだけで、いまさら帰る勇気もなかった。

「あんたが作ればいいでしょ！」

隣で待ち合わせをしていたカップルが、揉め始めた。とっちが料理を作るかで、揉めているらしい。世間では、お嫁さんは料理が上手いほうがいい、と言われているが本当だろうか？　料理の腕だけ

で結婚相手を決めるのは、軽率だと思う。男が料理すればいいだけだ。

おれの兄は、三ヶ月ほど前から料理教室に通い始めていた。肩身の狭い思いをするだろうと思っていたが、実際は中年のおばちゃんばかり。「お嫁さんが料理出来なくても安心ね」などと、おせっかいを焼いてくるらしい。先月に待望の女の子が入ってきた。童顔で、はにかむ笑顔がかわいいらしい女の子だった。艶やかな黒髪は腰ほどまであり、女らしさを感じずにはいられなかった。ぎこちない手つきで料理を作る姿を見て、料理を作ってもらうのも悪くないなと思ったらしい。彼女が一生懸命作ってくれた料理なら、どんな味でも喜んで食べる自分が容易に想像できたようだ。そんな兄の遅い初恋の前に立ちはだかるのは、やはりおばちゃんだった。

「あんたどうせ童貞なんでしょ？　初恋は実らないわよ」

大きなお世話である。おかげで、未だに話しかけられずにいるのだった。

「あ、あの！」

「へっ？」

突然、現実に引き戻され、奇声を発してしまった。

「才賀さん……かな？」

「そ、そうだけど……」

「は、初めまして！」

ポニーテールが印象的な、眼鏡少女だった。どこかで見たことがあるような……。

「あっ、間違えた……こ、こんにちは！」

知り合いだろうか？

奇妙な既視感の正体を探る様に、顔を覗き込むと、恥ずかしそうに顔を逸される。半年ぶりで相手に気づけないのは、おれのほうだった。

「もしかして……さ……え……？」

「……えっ」

「雰囲気変わってたから気づかなかった」
「……あっ」
彼女とは、付き合って1年ほどだろう。今日は、彼女から呼び出された。事故で電車が止まってから、一度も会っていなかった。別に喧嘩していたわけじゃない。電車が止まっていても、会おうと思えば会える距離だった。
ただ、気がつくと半年という月日が流れていた。
部屋にかざってある二人の写真を思い出す。おれの記憶が正しければ、半年前は鮮やかな金髪だった。
「なんで染めたの？」
「えっ……あっ……気分転換？」
彼女は自分の髪をまじまじと見つめている。気分転換失敗ということだろうか。思い描いていた彼女のイメージとは違い、ずいぶんと落ち着いて見える
この半年の間に、彼女にどんな変化があったのだろう。女性が髪を切るのは彼氏と別れたからだと聞いたことがある。なんだかそれに近いものを感じた。「と、とりあえず喫茶店でも入ろうか」
側にある喫茶店を指さす。
「は、はい！　ぜひ！」
一秒でも早く、無性に乾いたノドを潤したかった。

昼過ぎの店内は人がまばらで、店員も暇そうにしていた。店員に二人と告げると、おれのうしろをのぞき込んでくる。
「あれ？」
振り向くと、彼女の姿がなかった。

喫茶店を出ると、彼女すぐに見つかった。隣にある楽器屋のショウウィンドウを、熱心に覗いるようだ。
「どうかした？」
「……また、聞きたいです」

「えっ？　あ、ああ……そうだね」
彼女の不意打ちを受け、適当に相づちを打ってしまった。彼女はじっと見つめたまま動こうとしない。
「おーい」
「……」
「もしもーし」
「……」
問いかけに全く応じる様子はない。心奪われ、他の世界に旅立ってしまったらしい。後ろから覗いてみる。
左側には鍵盤、右側には多数のボタンが配置されており、中央は蛇腹になっている。アコーディオンだった。最近はアコーディオンが流行っているのだろうか？
おれの兄もアコーディオン弾いてた時期がある。きっかけは、彼女のいない兄に向けた何気ない一言だった。
「音楽をやればモテるんじゃない？」
家にあった唯一の楽器が、アコーディオンだった。普通はギター弾きたがるのだが、粋がっているようで嫌だったらしい。飽きずに練習を重ね、公園で路上ライブのようなこともしていた。足を止める人は物珍しいだけで、歌を聴いている人なんていない。自主制作したＣＤは一枚も売れなかった。
結局、目的の彼女を作ることは出来ずにやめてしまった。
そういえば、料理教室の女の子もよく歌を口ずさんでいたらしい。その曲は、世界でも知ってる人が一人しかいないぐらい、マイナーな曲だった。おれの一番好きな曲だったこともあって、運命的なものを感じてしまう。運命的なんて言葉が出るぐらい、おれの恋愛経験が足りないのは明白だった。
音楽をやるだけではモテないのは確かだった。それでも、女性は音楽が好きなことは、間違っていないのかもしれない。
運ばれてきたホットコーヒーを一口飲み、やっと落ち着く。どう

やら彼女のほうが緊張しているようで、さっきからしきりにこちらを見ては、慌てて目をそらしていた。
じっとしていられないが、話すこともできない。そんなジレンマに陥っているようだ。
眩しいぐらい明るい店内とは対照的に、重く薄暗い雰囲気が二人を包む。
「……お、お兄さんは元気ですか？」
突然、彼女が口を開いた。
「……才賀さん、お兄さんいますよね？」
おれは二人兄弟で、たしか彼女にも姉がいたはずだ。
「元気だけど……」
「……音楽、続けてますか？」
「その……半年前に止めたけど……」
「そ、そうでしたか……すみません」
そう言って、また黙り込んでしまった。謝る意味はわからないが、俯く姿は落ち込んでいるようにも見えた。このまま黙っていてもしかたない。とりあえず、疑問に思ったことを聞くことにした。
「さんづけなのはなんで？」
「……えっ」
「会ったとき才賀さんって」
おれはいつも呼び捨てにされていたはずだ。名前でなく名字で。才賀という名字がかっこいいらしい。
「その……あっ、久しぶりなので！」
「そうなんだ」
「そうです！」
「……」
「……」
「なんで敬語なの？」
「……だいぶ……久しぶりなので！」
「そうなんだ」

「……そうなんです！」
「……」
「……」
会話が終了した。深海のような沈黙が広がる。世の中の恋人同士は、どうやって会話を続けているのか教えて欲しい。
二人の空気を察するようにアコーディオンの音色が店内に鳴り響いた。彼女の携帯のようだ。携帯を片手にうろたえ、あたふたとしている。
「えっ、あっ！　わ、わたし！？」
彼女は、携帯とおれを交互に見比べるた後、割れ物を扱うように携帯を鞄の中にしまった。
「出なくていいの？」
「……全然いいです」
「出ていいよ」
「何というか……むしろ出たら負けかなって」
なぜ遠慮気味なのだろう？　おれの知っている彼女なら、遠慮せずに電話に出るはずだ。薄々感じていた違和感が、徐々に大きくなっていく。
髪の色が変わっていたこと……。
言葉遣いが敬語になっていること……。
挙動不審な彼女の態度……。
隠した宝物が見つからないように、冷静をよそおっているような……。ふと、兄の言葉を思い出す。
「携帯電話メールが来ても、その場でみなかったら浮気だよ」
料理教室のおばちゃんから教わったらしい。料理ではなく、恋愛指南をうけに行ってるようだった。その内容を思い出しながら、順番に当てはめていく
会話への反応・リアクションがうすい。
髪型や服装の好みが変る。
音楽の趣味や、好きな芸能人が変る。

彼女は見事に当てはまっていた。偶然の一致かもしれない。信じたい気持ちが小さく萎んでいく。彼女の反応は、すでに恋人同士のものではないように思えた。
終わってしまった恋。
別れ、そして失恋。
そんな言葉が頭をよぎる。彼女はもしかすると……。
「……あ、あの！」
体中から絞り出すような声で切り出された。表情は冷静に装っていたが、彼女の手は震えていた。
「……いるんです」
「……えっ」
耳を疑った。想像していたとはいえ、実際に言われるとは思ってなかった。もっと早く気づくべきだったのかもしれない。半年という時間は、人が変わるのに十分な時間だということに。
「会ってほしい人がいるんです」

駅を移動するとき、彼女は電車を一本見送った。乗らないのか訊くと彼女は「……乗ります」と答える。
その言葉に反抗するように、彼女の足は一歩も動かなかった。罪悪感にさいなまれているのだろうか？　あるいは、同情しているのかもしれない。
不思議なさみしさを感じる一方で、ほっとしている自分がいることに気づく。弱い心に自己嫌悪が込み上げてくる。おれは現実を黙って受け入れる事しか出来ない。それが、お互いにとって一番いい選択肢に思えた。

空が赤く染まった海沿いの公園。心地良い潮風を感じながら海を眺める。
『初恋は実らない』
それは本当だろうか？　本当なら、一度は失恋なければならない。

好きな人から嫌われる。
想像するだけで、体が切り裂かれるようだった。傷を回避するには、恋をしなければいいのだろうか？　はじめて恋をする人は、避けて通れない道なのだろうか？
「……かぜ、気持ちいいですね」
髪をなびかせながらつぶやく彼女の表情から、迷いの色が消えていた。おどおどした印象はなくなり、どこか吹っ切れたようなすがすがしささえ感じられる。
友達以上恋人未満。
そんな線引きをされた気がした。おれの脳内に構築されていた彼女の姿は、どこにもなかった。
後ろでは、青年がギターをかき鳴らしていた。おれの気持ちを代弁するかのように、がむしゃらに歌っている。立ち止まっている人はいない。その不格好ながら真っ直ぐな姿は、忘れてはいけないなにかを訴えているように見えた。そのせいか、とても居心地が悪かった。
「わかりますか？　彼が歌う理由……」
おれの考えを読んでいるかのように、彼女が訊いてくる。真っ先に浮かんだのは『女の子にモテるため』だったが、瞬時に考えをかき消す。
「歌を聴いてほしいから……」
「……違いますよ」
子供に教えるような優しい口調だった。
「……知ってほしいんだと思います」
「……自分はここにいるってことを」
「……だから一人でもいいんです」
「……たった一人でも気づいてもらえたなら、彼は救われるんですよ」
誰に向けるわけでもなく、ささやく彼女の表情は、どこか寂しげだった。それは同情や慈悲といったものではなく、純粋に心からわ

き出た感情のように思えた。
「……行きましょうか」
そう言って、彼女はその場を後にした。

派手なネオンサインで装飾された、無数の看板。建物の入り口は照明が落とされ、異様な雰囲気を漂わせている。通りゆく人々はカップルばかり。一目をはばからず、いちゃいちゃと特有のムードを漂わせている。この場所に立っていることが不思議でしかたない。
ラブホテル街。空想上の建物だと思うぐらい、縁の無かった場所。こんな形で来ることになるなんて思わなかった。これが、彼女にとっての贖罪なのだろうか。彼女は迷いを振り払うように先頭を歩く。
質問は一切受けつけない。そんな意思を強く感じた。

線路沿いの道をひたすら歩く。彼女は罪滅ぼしのつもりなのかもしれない。せめてもの償いとして自分の身を捧げる。彼女の覚悟の大きさを感じるには十分だった。
彼女の行為を受け入れることはできない。彼女が別れたいというなら素直に受け入れる。別れる代償に体を売るようなことをさせたくはなかった。
彼女の決心は固いように思える。彼女自身がそうしなければ、納得できないのかもしれない。彼女を傷つけずに断るには、どうすればいいのだろう？　ここまで覚悟を決めた人間を、説得する自信がなかった。
突然、彼女が立ち止まる。
「ここです」
そこはホテルの入り口ではなかった。だれか待っているわけでもない。立っているのはおれと彼女の二人だけ。道ばたには、いくつもの花束が供えられていた。
そこは半年前の事故現場だった。

静かに手をあわせる。花束の他にもぬいぐるみやたばこ、ＣＤまで供えてある。彼女が供えてあったＣＤを手に取る。いかにも手作りといった、安っぽいジャケットのものだった。
「彼女は、この曲が好きだったんです」

「彼女は、昔から人見知りの激しい子でした……」
「友達の輪にも上手く入れなかったみたいです……」
「わたしは、何もしてあげられませんでした……」
「気づいてあげることも出来なかった……」
「彼女が思い詰めていたことに……」
「自殺しようと考えていたそうです……」
「人生最後の散歩に選んだのが、あの公園でした……」
「その時、この人の歌を聴いたんです……」
「この人は、アコーディオン弾きながら歌っていました……」
「お世辞にも上手くはありませんでした……」
「誰か聴かせようとしているわけではないようでした……」
「ただ、自分の想いを真っ直ぐにはき出しいるだけで……」
「彼の歌に立ち止まる人は、一人もいませんでした……」
「だけど、彼の後ろで一人だけ聴いてる人がいました……」
「彼女です……」
「だれも聴いていないその歌は、彼女に届きました……」
「自分の代わりに叫んでくれる……」
「自分と同じ想いを持った人が他にもいる……」
「それが彼女の心に響いたんです……」
「彼女は命を救くわれたんです……」
「それから、何度も彼女はこの人の歌を聴きに行ってました……」
「彼の見えないところで聴いていたそうです……」
「彼女は、この人のおかげで、あなたと出会うことが出来たんです……」

彼女は、ＣＤを花束に立てかけた。
「このＣＤは、記念すべき最初の一枚なんだそうです」
「この人はすごく驚いていました」
「誰も聴いていない曲を欲しがる人なんて、いるとは思ってなかったんでしょうね」
「記念にと無償で譲ってくれたそうです」
「その時も、彼女はずっと俯いていました」
「恥ずかしくて、顔が見れなかったなんていうんですよ」
「ほんとは、お礼を言わないといけないぐらいなのに……」
思考が追いつかない。寒気が身を震わせ、鳥肌が立つのがわかった。
「君はいったい……」
「……も、申し訳ないです！」
突然、頭をさげ謝る彼女。彼女は掛けていた眼鏡をＣＤの横に置き、結っていた髪を下ろした。
「なっ……」
「お姉ちゃんの紗直なんです！」
「……」
声にならない。
紗直……。
知っている名前だった。
「このままじゃいけないってわかってたんです……」
「早く伝えなくちゃって……」
「でも、どうしても言い出せなくて……」
「もう誰も悲しませたくなくて……」
「だけど、ほっとくわけにもいかなくて……」
「それに、妹から何かあったらよろしくって言われてたし……」
「あとっ、あとっ……」
素になった彼女を見て、ついつい笑ってしまった。
「ふぇ？」

不思議そうにきょとんとしている。
「別に怒ってないから」
「そ、そうなんですか？？」
感じていた違和感の正体。無理やりはめたピースがばらばらになり、元の形に組み上がる。今日初めて会ったはずの彼女に感じた、奇妙な既視感。料理教室の女の子が口ずさむ、世界で一人しか知らないはずの歌。わかってしまえば、実に簡単なパズルだった。
「あ、あの！　この曲、すごくいい曲なんです！」
「私も大好きなんです！」
「あっ、でも……公園には来なくなっちゃって……」
「もう音楽止めちゃったのかも……」
「また聴きたいんですけど……」
誰も聴いていない曲に耳を傾ける少女。そのことを知らずに歌い続けていた。誰にも届いていないと思っていた歌は、届いていたんだ。それだけで救われた気がした。
ひとつの言葉が、歌うきっかけをくれた。
ひとつの歌が、一人の少女を救った。
ひとつの遺書が、彼女との出会いをくれた。
今、この歌を必要としている人が目の前にいる。歌おう。ニット帽をポケットから取り出す。
たった一人のために……いや、三人か……。最愛の人と共に旅立った、二人のためにも……。
今朝供えた花の前で、『俺』はまた歌い始める。
『おれ』がまとった鎧は、もう必要ない。
『俺』の足で立ち、『俺』の曲を、偽りのない『俺』が歌う。
初恋の相手に、想いが届くことを祈りながら……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4904z/

ブラザーシスター

2011年12月16日18時47分発行